



Title	国分報告へのコメント（1）
Author(s)	高井, 潔司; TAKAI, Kiyoshi
Citation	北大法学論集, 51(4), 200-203
Issue Date	2000-11-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15030
Type	departmental bulletin paper
File Information	51(4)_p200-203.pdf



国分報告へのコメント(一)

高井 潔 司 (北海道大学言語文化部教授)

本日は主催者にとっては感謝の気持ち、一つには不満を申し述べたい。評者は、九九年三月まで読売新聞の記者で北京や上海に駐在した経験がある。この四月から北海道大学に赴任したが、本日の国分教授、明日の若林教授といった、すばらしいスピーカーの話聞く機会ができたことに感謝の意を表したい。北海道でこういう一流のチャイナウォッチャーから話を聞く機会はなかなかなく、これに対しては感謝の気持ちでいっぱいである。

しかし、国分教授のシャープな分析は学界でも定評があり、それに対してコメントをつけるのは大変難しいことである。主催者側は、元新聞記者であるから批評するのが得意であろうと考えたのである。だが、評者は今はチャイナ・ウォッチングの現場にいるわけではないので、コメントする能力には限界がある。この点をまず申し述べておきたい。

国分教授の意見に大むね賛同している。評者は、現代中国については新聞報道を中心に情報収集しているが、その場合に中国に対する見方をこちらがきちんともっていないと、情報を読み解けないのではないかと疑問をずっと抱いている。新聞記者をやっておりながらこのようなことを考えるのは、ちよつとおかしな感じを抱くかもしれないが、そ

うではない。新聞記者が記事を書く場合、トップ記事でも一日千字程度である。原稿用紙で二枚ちよつとの記事であつて、自身で記事を書いていても、常に一面的なことしか書いていないのではないか、欠落してしまつてることがたくさんあるのではないかという疑念を有してきた。評者は天安門事件の時も、鄧小平が亡くなつた時も北京に滞在していた。国分報告では、多層的に切り取るということが述べられているが、新聞記者の記事は断面的でしかなく、その断面が本当に中国理解に役立っているのか、プラスになるどころか逆に間違つた中国観を提供してしまつていないのかという疑念をもつていたのである。こうしたことをふまえて一九九六年に『中国情報をどう読むか』という本を出版するなどして、ここ五年ほど情報をどのように読み取ればよいのかということを考えてきた。

国分報告は、中国語の難しさから出発し、中国をどう見るかという見方を中心に、話が進んだ。中国情報をどう読み解くかという、評者が長年考へてきた「視点」を提示してくれた。時間の関係で詳細に説明されなかつたが、評者は後半部に興味をもっている。全体として、非常におもしろく感じている。内容については、ほとんど何も異存はない。ただ、扱いをよく注意する必要がある問題があつた。本報告では、中国は言うこととやることが違うという指摘があつたが、このご指摘は非常に正しいと思う。だが、それを直ちに評価の対象にしてはいけないという気がしている。つまり、その時点で直ちに「やつぱり中国は嘘つきだ」と価値判断することの是非である。戦前から「中国人は嘘つきだ」などと日本人が中国人を差別、あるいは軽蔑してきたが、これは大きな認識の誤りだった。中国は言うこととやることは違うということから、中国人は嘘つきで信用がならないというふうに考えるのは間違つていふと評者は考へている。この点をはつきり認識した上で、中国は本当に行動する時は如何に行動するのかということを見極める視点を持つべきというのが評者の考へである。

例えばWTOの加盟の問題についての日本の新聞報道をみると、九九年四月五月段階に李鵬全人代委員長や江沢

民主席が行った加盟に消極的な発言を本心と受け止め、さらに十一月の時点で一転して米国との間に加盟合意ができると今度は朱鎔基首相が力を増してきたと解釈し、朱と江の対立という文脈の記事が出てくる。これでは、まるで朱鎔基首相が権力闘争に勝ったかのような印象を与える議論になってしまう。

国分報告では、「言うこととやるがちがう」という話があったが、問題なのは江沢民主席が四月五月に言ったことについて、それが如何なる背景で言われているのかという点が重要だ。それを分析しておけば、十一月の時点で合意に達すると予測できるか否かは別にして、その問題がどのような状況の下で収拾されていくのかという視点が出てくると考えられる。

すなわち、国分報告での指摘は正しいと思うのだが、あまり嘘つきという評価にはなってしまうまいかと思うのである。評者は国分報告の分類に従えば改革开放史観の世代であり、またこのようなことを述べるといかにも改革开放史観の人間だという指摘があるかもしれないが、「中国人は嘘つきよ」と直ちに判断することは控えたいということ述べたい。

次に、「中国の事情に即した理解」という点についても一言申し述べておきたい。実は、中国自身もこうした主張を八〇年代後半からし始めている。中国についてはまず中国の国情を理解してほしい、外からの価値観、具体的には欧米の価値観をそのまま中国にあてはめて、中国問題を分析したり、評論して欲しくないと言っている。国分報告での指摘は、その中国側からの物言いに対応しているのではないかと思う。これも改革开放史観の視点かもしれないが、国情理解は非常に重要であり、中国自身も政策決定に当たって国情理解という視点を強調し始めている。これは革命時代のイデオロギーを中心にした政策決定ではなく、中国の国情から出発した立案を行い始めているということである。鄧小平が江沢民に引き継いでいる「实事求是」という発想であろう。中国自身もそういう考え方を始めているので、中国を

外から見ていく場合も非常に重量なポイントになっていると思う。中国の国情が中国自身の政策決定の根幹におかれているのだから、我々もその国情理解についていくことが肝要になる。こうした見方で中国を見ていけば、中国の動向が以前ほど分かりにくいものではなくなり、次第に分かりやすくなるのではないかと評者は考えている。このように述べると国分報告にあった日中友好史観に繋がってしまうのかもしれない。

最後に一点。報告中の近代史現代史の区分に関する指摘は興味深かったのだが、WTO合意も中国の時代を画するよ
うな出来事ではなかったのかと評者には思える。ナシヨナリズムとグローバリゼーションの衝突という視点から考えれば、国分報告では冒頭に「グローバリゼーションに中国は負けたのだ」という指摘があった。この合意が実際に中国の中を変えていくのか否かはまだ不明だが、評者もこれはかなり大きな意義があると考えている。そして、この合意のプロセスは遊川報告で詳しく述べられることと思うが、この点こそが今回のシンポジウムの主催者の一人であるグローバリゼーション研究会の大きなテーマであると思われ、評者は考えている。